

僕の姉が不幸な交通事故で亡くなって一年が過ぎようとしていた。

飲酒運転の自動車が、深夜バイトから帰宅途中だった姉さんに突っ込んだ。自動車は速度が出ていたために、姉さんは即死だった。

——平成二十三年十二月十八日

それから一年が過ぎ、姉さんのことが好きだった僕の心の傷は癒されつつあった。

「では、一周忌法要は一カ月後の一月二十二日に行わせていただくということだ」

今日は、大経寺である姉さんの一周忌法要の打ち合わせだ。僕は親についてくる形で参加していた。

「時間はどうなさいますか？　今のところ他の方のご予定が入っていませんのでいつでも大丈夫ですが」

「そうですね……」

「あなた、昼からでいいんじゃない？　そのあとみんなでお斎に行くのにも都合がいいし」

「うん。そうだな」

両親が最良の選択かを話している。

「はい」

僕は控えめに手をあげる。

「もしよろしければですけど……」

僕のこの提案によって、ある作戦が始まった。

——平成二十四年一月二十二日

それから月日が流れ、一周忌法要の日がやってきた。

すでに、住職さんの読経、法話が終わり、納骨の準備が行われている。

「花ちゃん。なんであなたが」

母さんは姉さんが亡くなった日のことを思い出したのか、涙を流していた。その隣に、父さんはそっと寄り添う。

「では、納骨の準備が整いましたので、今一度合掌願います」

僕、両親そして参列者が手を合わせ、目を閉じる。

そして、あつという間に姉は土の中で永久の眠りについた。

これで姉さんは、遠い場所へ行ってしまった。それを葬式の日以上に感じてしまったという自分がいた。涙は出てこない。僕の姉さんに対する涙の泉は枯れてしまっているのかもしれない。

一番前で納骨を見ていた父さんはクルリと振り返り、口を開く。

「みなさま、本日はお忙しい中、娘の一周忌法要にお越しいただきましてありがとうございます。娘も天国で喜んでいてと思います。法要はこれで終しまいでございます。また、お時間ございましたら、このあとお齋をいただく予定にしておりますので、よろしくお願いたします。そして、今回は息子の提案によりこのあと企画がございます。こちらのほうも時間ございましたらよろしくお願いたします」

子どものように泣きじゃくる母さんの隣りで、大黒柱としての父さんの姿を見た。休日はソファに寝転がってテレビを観ているのが常であるので、その姿に改められた。

「このあとご参加くださる方はお堂のほうでご待機をお願いいたします」
お寺の方が、案内してくださる。

さっきまで法要を行っていたお堂はモデルチェンジされていた。

部屋の中にこたつが三つ準備されていたのだ。これは僕がお願いしたわけではなく、お寺の方のご配慮だ。

「時間になるまでご自由にお使いください。甘酒もありますので」

「すみません。いたれりつくせりで」

父さんが頭を下げる。

「いえいえ、故人の供養をしたいという気持ちは私も同じでございますので、そのお手伝いは精一杯させていただきますつもりです」

僕たちはこたつに潜り込む。一月の肌を刺すような寒さにこたつが、ありがたかったの
は言うまでもない。

ぼくのこたつには同世代の親戚が集まった。姉さんや僕と何度も遊んだメンバーだ、僕たちは最近の話などで盛り上がった。どんな大学生活を送っているとか、恋愛の話とか、姉さんと同じ年の従姉にいたっては結婚秒読みらしい。

「それにしても今日は冷えるね」

「これなら雪でも降りそうだね」

「それはさすがにないんじゃない」

「それは勘弁」

笑いが起きる。

そんな他愛もない話に花を咲かせているあいだに陽が落ち始め、空は朱と藍が混じっている。

僕は残っていた甘酒を一気に飲み干すと、こたつから体をだし、立ち上がる。

みんなの目がこちらへと向く。

「まず、なぜ今回このような企画を考えたかをお話ししたいと思います」

僕は一つ息をのみ、話を始める。

「あれは一昨年の夏の話です」

——平成二十二年夏

太陽は真上を過ぎた頃、クーラーの効いた涼しい部屋で、マンガをベッドに寝そべって読んでいた僕に、姉さんが覗き込むようにして声をかけた。

「今日暇？」

「暇だけど」

僕はマンガから目を離し言葉を返す。

「だったら私に付き合ってよ」

「仕方ないな。じゃあ着替えてくる」

ぶっきらぼうに答えたが、心は躍っている。階段を昇る足も速くなっている。

どこへ行くかはわからないが、姉さんと一緒に出掛けることができる。

「準備できたよ」

「早いね。じゃあ行こうか」

「うん」

そのあと僕は姉さんに連れられて百貨店回りをした。しかし、何も購入することはなく、ただただウィンドウショッピングをしているだけだった。

「そろそろかな？」

姉さんは時計を見る。

今、午後の五時を回ったところだ。

「なにが？」

「まあいいからついてきて」

姉さんの手に引かれて、百貨店からでる。

僕が連れて行かれたのは河原だった。

普段は人通りがまばらな河原も、今日はなぜか人で埋まっていた。

「なんと今日は花火大会です」

夏休みに入って引きこもっていた僕は花火大会なんてすっかり忘れていた。というよりも花火大会の存在すら知らなかった。

時計は七時より少し手前をさしている。空はまだ薄っすらと明るい。

『バーン』

怒号のような花火が一発あがる。

それに続けとばかりに次々と花火が上がっていく。

きれいだな。そう素直に思えた。

「知ってる？ お父さんがお母さんにプロポーズしたのってこの花火大会だったんだよ」
知らなかった。

「だからかな、私この花火が好き」

「だから姉さんは火花って名前なの？」

「そうかもね」

嬉々とした笑顔で話す姉さん。それが花火以上に美しく思えた。
だから……

「来年も一緒に見にこよう」

「うん。そうだね」

僕は、姉さんと約束した。

——平成二十四年一月二十二日

「だから、姉さんとの約束を果たしたいと思った。大きな花火を打ち上げるとはできないけど、姉さんの墓の前で花火をしようと思った。僕の勝手なエゴかもしれないけど付き合ってもらえてうれしい。死んでしまった姉さんに手向けの花火を備えたいと思います」
母さんも、そして父も涙を流していた。その日のことを思いだしているのかもしれない。そして、親戚、お寺の方からも拍手がわく。

「ありがとう」

拍手が止み、父さんの口から言葉が漏れる。

「息子が企画してくれた花火大会。時期は違いますが、楽しんでもらえたらと思います」
その父さんの言葉を境に外へと出ていく。

寺の電気が消され、辺りは暗く闇に包まれていた。ロウソクの火だけが辺りを照らす。

「みなさま、花火をお持ちになりましたか？ お寺の方もよろしければ花火をお持ちください」

全員が花火を手を持ったのを確認する。

「点火」

一斉に花火から火花が噴射される。

童心に帰ったのか、大人たちも次から次へと花火に火をつけていく。

しばらくたって、雪がひらひらと舞い散り始める。

「きれい」

誰かがそう発する。

澄んだ空気の中で耀く花火の光は雪と相まって幻想的な雰囲気を醸しだしていた。

僕は、雪が顔に降りかかるのも構わずに叫ぶ。

「どう？ あの時の花火もきれいだったけど、冬にやる花火もきれいだったろ」

花火と一緒に見るといいう約束。これは果たされることはなかった。しかし、今必ず刻まれたのだろう。

亡姉（ぼうし）の最期のおもいでとして……